

国文学研究資料館蔵黒本『四天王』について

——『頼^{らい}光^{くわう} 金^{きん}臣^{しん} 本末^{いちだい}記^き』——

高 橋 則 子

要 旨 国文学研究資料館蔵黒本『四天王』は、『補訂版国書総目録』・『古典籍総合目録』・国文学研究資料館「マ
イクロ資料・和古書目録データベース」に未載である。これは、宝暦六年（一七五六）刊黒本『頼^{らい}光^{くわう} 金^{きん}臣^{しん} 本末^{いちだい}記^き』
ではないかと思われ、現在のところ他での所蔵を見ない。本書の内容は、源頼光の四天王の一代記であり、『前太平記』
から直接取材したものである。

国文学研究資料館蔵黒本『(四天王)』(書名は柱記による)(請求番号 ナ4・656)について、以下の項目に従って述べる。

一、書誌及び解題

二、写真版及び翻刻・校訂

一、書誌及び解題

国文学研究資料館蔵黒本『(四天王)』は、後のものである帙に『四天王揃』と墨書され、原絵題簽に『頼光一代記下』との略外題を持つ。『補訂版国書総目録』に、「四天王揃 してんのうぞろえ ⑧ 黒本 ⑨ 東北大狩野(有欠、一冊)」と記される本は、『東北大学所蔵和漢書古典分類目録 和書』(昭和五十三年刊)中巻の浮世草子の項に、「新板四天王揃 狩5・1669・1 京都八文字八左衛門(複製)」と記されているが、『東北大学附属図書館所蔵 狩野文庫目録 和書之部 第四門 語学・文学』(平成六年刊)には所載されず、現在所在不明となっている。

また、本書は『補訂版国書総目録』・『古典籍総合目録』に記される次の黒本とは、別本である。

『補訂版国書総目録』

四天王 三卷 ⑧ 四天わう ⑧ 黒本 ⑨ 日比谷東京

頼光一代記 五卷 ⑧ 黒本 ⑨ 日比谷加賀

『古典籍総合目録』

四天王 してんのう 三卷 ⑧ 四天わう ⑧ 黒本 ⑨ 国文研(海尊故郷錦と合(一冊))

『補訂版国書総目録』に記載される、都立中央図書館東京誌料蔵『(四天王)』は、刊行後墨書された内題による書名であり、柱題としては『(四天王)』である。これは『海尊故郷錦』と合一冊になった国文学研究資料館蔵『(四天王)』(『古典籍総合目録』記載、柱題は『(四天王)』)と同板本であり、一丁、十一〜十五丁が欠落している。以下国文研(『海尊故郷錦』と合一冊本)及び東京誌料蔵『(四天王)』を、『(四天王)』と表記する。この黒本『(四天王)』は、元々は三卷三冊十五丁、西村屋与八板であって、本書とは別本である。また、『補訂版国書総目録』に記載される、都立中央図書館加賀文庫蔵『頼光一代記』は二十五丁ものの黄表紙であって、本書とは別本である。

『補訂版国書総目録』・『古典籍総合目録』に未載であるが、国文学研究資料館の「マイクロ資料・和古書目録データベース」で検索しうる、黒本『頼光一代記』には、京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫蔵の五卷五冊ものがある。この『頼光一代記』は後題簽による書名で、大東急記念文庫蔵『新板酒天どうし』と同板本である。同じく、同データベースで検索しうる『(四天王)』には、都立中央図書館東京誌料蔵『(四天王)』があり、これは前出した柱題『(四天王)』の二書とは違って、六卷六冊三十丁で、大東急記念文庫蔵『四天王誓の礎』と同板本である。

『赤本黒本青本版心索引(予備版)』(木村八重子・青裳堂書店・平成九年刊・一九九七)に載る「四天王」の柱題の作品は、『四天王大江山入』(三十丁もの、後題簽)、『新田四天王』(上中下三卷、鶴屋板)の二作品であるが、前者については所蔵未詳、後者については本書とは別本である。また、『赤本黒本青本版心索引(予備版)』には、柱題「四てん王」(外題・板元未詳)と、「四てんわう・四てん王」(『新版 諏訪 瑞夢 四天王権興』、西宮板)も挙げられているが、前者については未詳、後者は本書とは別本である。

以上を整理して、柱題「四天王」外題「頼光一代記」とされる初期草双紙諸本の関係を述べると、

『(四天王)』三卷三冊十五丁。都立中央図書館東京誌料本(落丁本)。国文学研究資料館本(『海尊故郷錦』

と合一冊)。

『(四天王)』 六卷六冊三十丁。都立中央図書館東京誌料本。大東急記念文庫本『四天王誉の礎』。

『頼光一代記』 五卷五冊二十五丁。黄表紙。都立中央図書館加賀文庫本。

『頼光一代記』 五卷五冊二十五丁。黒本。舞鶴市郷土資料館本。大東急記念文庫本『新板酒天どうし』。

となり、本書はこれらとは別本である。

本書の外題は『頼^い光^{くはう} 金^{きん}臣^{しん} 本^い末^{ちだい}記』ではないか、と思われる。『頼^い光^{くはう} 金^{きん}臣^{しん} 本^い末^{ちだい}記』は、黒本『播州曾根松』

の「子正月新板目録」広告によると、絵師鳥居清倍・鳥居清満、板元鱗形屋孫兵衛、二冊ものである。刊年は、鳥居清倍の活躍時期から宝暦六年と思われる。本書は下巻のみしか残存していないが、下巻の内容は源頼光四天王の内の二人の一代記である。更に後述することく、書誌的事項も、広告に記される『頼^い光^{くはう} 金^{きん}臣^{しん} 本^い末^{ちだい}記』の体裁と一致する。

以下、本書の書誌的体裁を記す。

表紙 原のもの。黒色無地。

題簽 原のもの。但し絵題簽のみ残存。

書名 絵題簽に「頼光一代記」、柱題に「(四天王)」とある。

柱記

四天王

六

四天王

十終

寸法 表紙 縦一八、四 cm 横一三、二 cm

匡郭 縦一六、〇 cm 横一一、五 cm

紙数 五丁（但し丁付は六丁十終。一丁五丁欠で元は二冊ものだったと思われる）。

作者・画工 未詳。

板元 鱗形屋（六丁表匡郭上の商標より）。

刊年 未詳。

備考 表紙見返しに、「本主 彦五郎」の墨書あり。三田村彦五郎旧蔵本と思われる。なお、前述したように、もし

本書が『頼光 金臣 本末記』だとすると、画工は鳥居清倍・鳥居清満、刊年は宝暦六年である。

本書の梗概を記す。

【梗概】卜部季武うべすゑくにの一子季武すゑたけは、康保年中に勘当されて、足柄山の麓の律院に七年間忍び暮らしていた。卜部季武は、七十九才になる父が存命のうちに勘当を許されようと、三島明神に祈り荒行する。源頼光が関東下向の折、季武は三島明神の示現により、頼光の止宿する旅館を尋ねて家臣となる。源頼光逝去の折、嫡子頼国に父祖伝来の宝を相伝した。卜部季武は、治安二年の春七十三才で病死し、その子武俊は、頼光存生時より次男頼信に仕えた。天延四年頼光は上洛途上、足柄峠にて赤色の雲氣を認めて、その下に居た老女の童を得る。老女は、山で寝た時に赤竜と通じて孕んだ子供と言う。頼光は童を酒田公時と命名する。頼光逝去後、四天王は毎日廟参した。公時は頼光生前から妻を迎えるように言われていたが、一生娶らず、頼光の死後そのまま行方不明となった。人々は公時を追うが、足柄山で見失い、公時は仙人となって天上する（下巻）。

<p>黒本『(四天王)』</p>	<p>『前太平記』</p>
<p>(六才) 多田の満仲御隠居あり、新発意の満慶と改めらる。</p>	<p>(巻第十八満仲朝臣祝髪事) 今日よりして満慶新発意、法華三昧院を常の住所として、此にのみぞ坐しける。</p>

本書は頼光四天王のうち、卜部季武と酒田公時が、頼光の家臣となる経緯や頼光逝去後の行動を描いたもので、『前太平記』をその典拠とする。本書が取材したのは、四天王説話で有名な酒吞童子や土蜘蛛退治ではない部分であり、まさに頼光近臣の一代記であって、他の草双紙で同様のものは現在のところ見いだし得ない。加えて、『前太平記』の詞章との類似性が高く、『前太平記』から直接取材した可能性がある。斎藤幹宏氏は、『(諏訪瑞夢 四天王権輿)』について「(平成2年度科学研究費による草双紙研究報告書)平成三年八月刊・東京学芸大学国語教育学科古典文学第六研究室」で、平仮名交り無刊記本『前太平記』の挿絵と草双紙の絵が、多数箇所類似しているという指摘を行っているが、草双紙作者が『前太平記』本文を参照している可能性も考えられよう。以下、本書の校訂本文該当箇所と、片仮名交り無刊記四十一冊本(国立公文書館内閣文庫所蔵)を底本とした、『叢書江戸文庫③④ 前太平記(上)』(下)』(板垣俊一校訂・昭和六十三年・平成元年刊・一九八八・一九八九・国書刊行会)の該当箇所との比較を試みる。

そのころ卜部季国とて老臣あり。一子を持てり。：季武康保年中いさ、かの事にて勘当せられ、かなたこなたと彷徨い、伊豆の国足柄山の麓、律院に縁あり、こゝに忍びて居たりけり。

(六ウ) 季武は勘当を受け、早七ヶ年に及ぶ。父既に七十九才なり。何卒父の許しを願はばやと、荒行して三島明神へ祈りけり。

(七ウ) 父祖より伝はる家の宝を渡し給ふ。蜘蛛切鬼丸の名剣 榊花女より伝へられし、水破兵破の矢、雷上動の弓。葉早紅葉の直垂。頼国譲りの祝物受け給ふ。

(八オ) 卜部季武治安二年の春七十三才にて病死せり。一子武俊は、いかゞ思ひけん、

(巻第十五頼光朝臣総州下向事付卜部季武事) 満仲朝臣の老臣卜部次官季国：詮無き事にて、往んじ康保の比、何処ともなく追ひ失ひ候ひつる：季武も父が勘氣を得てより、伊豆国足柄山の下に、縁ある律院に立ち忍びて、

(巻第十五頼光朝臣総州下向事付卜部季武事) 早七箇年をぞ送りける。：何にもして父が存命の中に、今一度宥免の言をも聞き、：指を折りて父が年を算ふれば、今年は七十九歳なり。：当国三島明神に日毎に参詣

(巻第二十三頼光朝臣逝去事) 父祖相承の靈剣、蜘蛛切・鬼丸、並びに榊花女より伝えられし、水破・兵破・雷上動、早黄葉の直垂は、嫡子頼国相伝あり

(巻第二十三四天王等向後事) 卜部勘解由判官季武は、治安二年の春、七十三歳にて病死せり。一子武俊は、如何思ひけん、摂州朝臣存生の

頼光御存生より、二男頼信に仕へ申す。

(八ウ九オ) 頼光は天延四年三月、都へ上り給はんとて、相模の国を歴、足柄峠を見給へば、赤色の雲氣有り。…時に老女言ふ。「これ我が子也。彼が父を知らず。我山に寝しに、赤き竜来つて通す。その時雷鳴り、夢覚むれば、果たして彼を孕めり。生れて廿一年経たり。されば山嶽を難しとせず、盤石を重しとせず」と語る。頼光喜び給ふ。山姥が童に酒田公時と言ふ名を下さる、。

(九ウ十オ) 頼光御葬送事終はり、四天王毎日廟参して、いまする如く礼を尽くしけり。然るに公時剛者の後なからん事を本意なく思しめし、「妻を迎へよ」と、頼光度々仰けれど、御受け申さず。「君御存命

時より頼信朝臣に仕へけり。

(卷第十六頼光朝臣上洛事付酒田公時事) 総州太守頼光朝臣、予ては天延四年八月には、任限充ちて上洛有るべきにて有りけるを、遮つて其年の三月…急ぎ上洛せらるべき由仰せ下さる。…相模国より陸路を歴て、足柄山に差し懸かり、峠に眺望し給へば…赤色の雲氣あり。…老嫗が曰く、「是我が子なり。而も父無し。…一日此嶺に出で、寝ねたりしに、夢中に赤竜来たつて妾に通ず。其時、雷鳴夥しくして驚き覚めぬ。果たして此子を孕めり。生まれてより廿一年を歴たり。長に及んで、山嶽をも難しと為ず、盤石をも重しと為ず。…太守斜めならず喜び給ひ…其名を酒田公時と名乗るべし。

(卷第二十三四天王等向後事) 四天王の輩は、尚も追慕の余りに、三月の間、毎日廟参を企て、如在の礼を尽くしけり。然るに酒田公時は、剛者の後なからん事本意なしとて、摂州朝臣：「何なる妻をも具せよかし」と、度々仰せられけれ共、公時敢へて承引せず、…君の御生涯随分忠を尽くし、…君千歳の後は行跡ふべき様あり。…とて、一

の間は、忠を尽くし、その後は思ふ旨有」とて敬い奉る。その後御墓に参り、「今既に我功成りの望みたんぬ。主従の契約、朋輩の懇ろこれまで」と行方知らす成にける。四天王の人々「けしからぬ、酒田殿、有様や」と止むれど、蝶鳥の如く飛んで行く。……頼国慌て、公時を止めさせ給ふ。

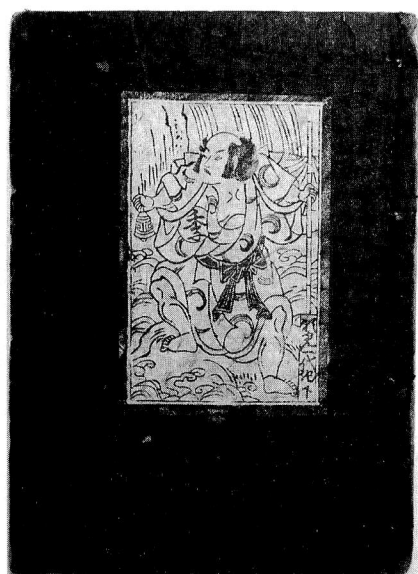
(十ウ) 大勢にて酒田が行方を尋ねられしに、足柄山にて見失ふ。

生妻女は具せざりけり。……廟所の前にて申しけるは、……今已に望み足り功成りぬ。主従の契り朋友の昵、心の長は尽くしたり。御暇申す、人々」とて、……直ぐに別れて出で、行く。綱・季武・貞光も、「こはけしからぬ酒田殿の形勢や。……早行方を失ひけり。……頼国大きに驚き給ひ、「何にもして留どめよ」

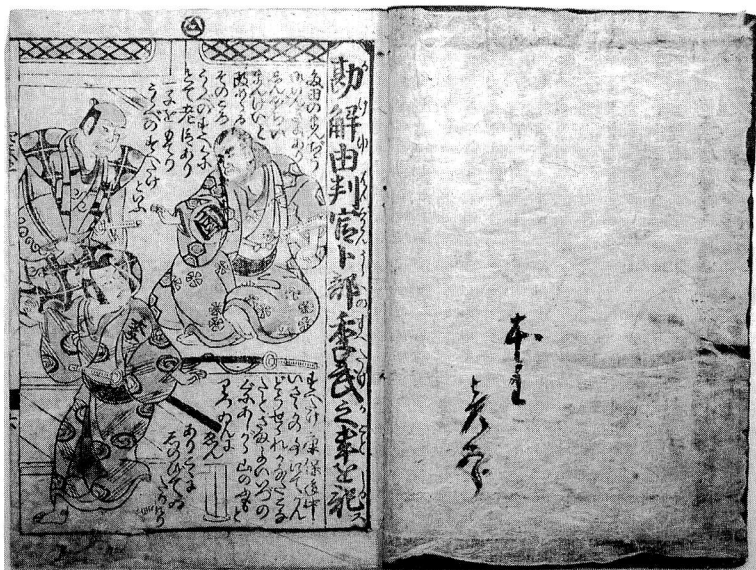
(巻第二十三四天王等向後事) 数多の人を出だして其行方を求めさせけるに、伊豆国足柄山にて忽ち其跡を見失ひしかば、谷嶺を分け、木草の陰まで捜し求めけれ共、遂に跡を見せざりけり。

以上のごとく、本書は『前太平記』と、多くの箇所から表現の細部にわたつての類似が伺われ、『前太平記』を直接の取材源とした可能性が考えられる。

二、写真版及び翻刻・校訂



(表紙)



(6才)



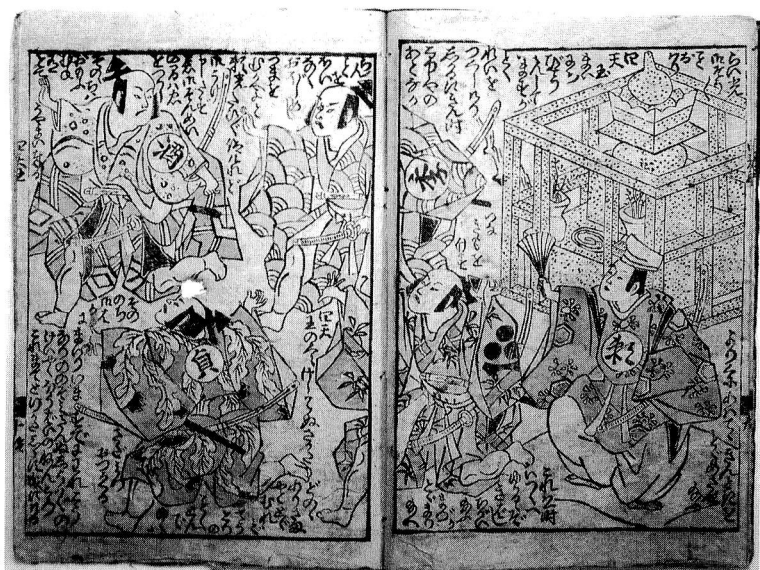
(6ウ)

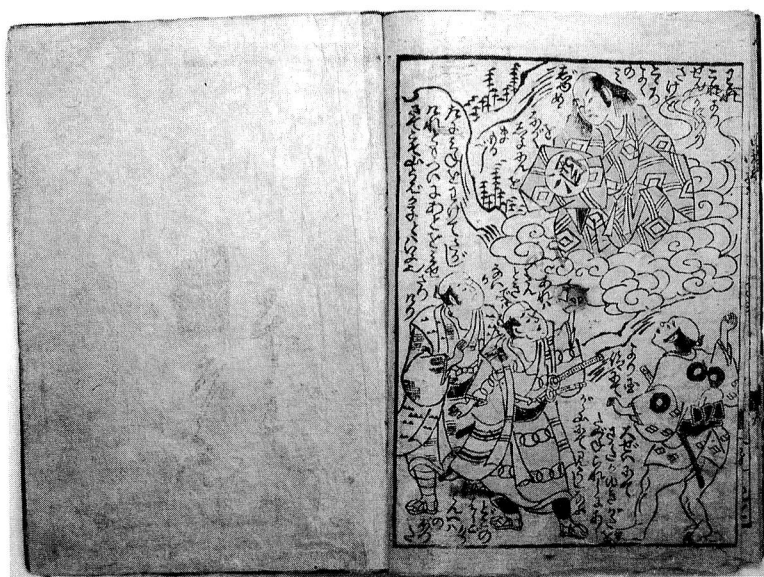
(7オ)



(7ウ)

(8オ)





(10ウ)

翻刻は読みやすくするために、以下のことを原則とした。

一、適宜句読点や「」を付した。

二、原本で仮名表記となっている部分に、適宜漢字をあて、原本の表記を振り仮名で記した。また、原本において漢字に振り仮名表記がなされていた場合は、振り仮名部分に（ ）を付して区別した。

(表紙)

頼光一代記 下

(表紙裏)

本主 彦五郎

(六才)

勘解由判官かかげゆはんくわん卜部季武うらべのすけたけ之事ことを記す

多田またの満仲御隠居まんちゅういんきょあり、新発意はらちの満慶まんけいと改めらる。そのころ卜部季国うらべのすけくにとて老臣あり。一子を持てり。卜部季武うらべのすけたけと言ふ。
季武すけたけ康保年中いさ、かの事にて勘当かんとうせられ、かなたこなたと彷徨さまよい、伊豆いづの国足柄山くたあしがらの麓ふもと、律院りつゐんに縁えんあり、こゝに忍しのびて居たりけり。

(六ウ・七オ)

季武は勘当を受け、早七ヶ年に及ぶ。父既に七十九才なり。何卒父の許しを願はばやと、荒行して三島明神へ祈りけり。「あら、有難や。結願の御告げありて、頼光の関東御下向を待ちける」三七日断食荒行。ト部の季武かくて源の頼光、東へ御下り有、三島の旅館に着き給ふ。季武明神の御示現にまかせ、御旅館に來たり、案内乞ふ。「どなたでござる」渡辺出で迎ひ、頼光へかくと申上る。これより、季武頼光の忠臣となる。

(七ウ・八オ)

頼光御惱みにかゝらせ給へば、御嫡子頼国殿を近く召され、「我もし身罷るとも、朝家を重んじ奉る事專一なり」とて、父祖より伝はる家の宝を渡し給ふ。渡辺源次御宝物持ち出て頼光の御披見にいる。榊花女より伝へられし、水破兵破の矢、雷上動の弓。蜘蛛切鬼丸の名劍、葉早紅葉の直垂。嫡子頼国、頼国譲りの祝物受け給ふ。ト部季武、治安二年の春七十三才にて病死せり。一子武俊はいかゞ思ひけん、頼光御存生より、二男頼信に仕へ申す。ト部季武

(八ウ・九オ)

主馬佑民部酒田公時之事を記す。

頼光は天延四年三月、都へ上り給はんとて、相模の国を歴、足柄峠を見給へば、赤色の雲氣あり。その下にて老女に對面有。童を得て、主従の契約あり。酒田公時と名付給ふ。時に老女言ふ。「これ我が子也。彼が父を知らず。我山に寝しに、赤き竜來つて通ず。その時雷鳴り、夢覺むれば、果たして彼を孕めり。生れて廿一年経たり。されば山嶽を難しとせず、盤石を重しとせず」と語る。山姥寝入る。頼光喜び給ふ。山姥が童に酒田公時と言ふ名

を下さるゝ。

(九ウ・十オ)

頼光御葬送事終はり、四天王毎日廟参して、いすが如く礼を尽くしけり。然るに公時剛者の後なからん事を、本意なく思しめし、「妻を迎へよ」と、頼光度々仰けれど、御受け申さず。「君御存命の間は、忠を尽くし、その後は思ふ旨有」とて、敬い奉る。その後御墓に参り、「今既に我功成りの望みたんぬ。主従の契約、朋輩の懇ろこれまて」と行方知らす成にける。頼国慌て、公時を止めさせ給ふ。綱肝を消す。「これ公時、いつくへ行かるゝぞ。氣ばし違ひ給ふか。まづ止まり給へ」四天王の人々「けしからぬ、酒田殿、有様や」と、止むれど、蝶鳥の如く飛んで行く。貞光追つかくる。

(十ウ)

頼国仰にて大勢にて酒田が行方を尋ねられしに、足柄山にて見失ふ。「我これより仙家に入り、酒を快く飲み、寿命を長く諸人を守るべし」「あれは公時ではないか」「どこの梯子から天へは上つた」谷嶺を分けて搜しけれども、ついに跡を見せさりけり。さてこそ山姥か子とは言ふ也。